

# 広島大学学術情報リポジトリ

## Hiroshima University Institutional Repository

Title	日常性を転換させる方法としてのおまじない : 「きつねの窓」をのぞいてみたら
Author(s)	武村, 昌於
Citation	児童の言語生態研究 , 18 : 76 - 87
Issue Date	2018-10-27
DOI	
Self DOI	
URL	<a href="http://ir.lib.hiroshima-u.ac.jp/00046612">http://ir.lib.hiroshima-u.ac.jp/00046612</a>
Right	
Relation	



# 日常性を転換させる方法としてのおまじない

——「きつねの窓」をのぞいてみたら——

教材 行動伝承の手遊び「きつねの窓」 武村 昌 於

## 授業のポイント

授業の中で子どもたちは、昔から伝わるおまじないとしての「きつねの窓」を実際に作り、その中に異世界をのぞき見る。そのイマジネーションの働きは、無意識の世界へ誘い、それが日常性を転換させる契機となる。その不思議な力を体感することによって、自分のイマジネーションを開放し、ヴァーチャル世界とは異なった、「自分の」無意識世界を意識化することになる。

## 1. はじめに

『きつねの窓』（安房直子著）というファンタジー作品がある。「非現実の世界に迷い込んだ主人公が、子狐に出会い、その子狐に桔梗の花で指を染めてもらう。青く染まった両手の指で『きつねの窓』の形を作ると、そこ

には今は亡き女の子が見え、子狐の窓には撃たれて死んだ母狐の姿が映る。現実の世界に戻った主人公は、家に帰るなり、うっかりその指を洗ってしまう。」というお話である。

いわゆる「国語の授業」では、その作品を用いて「文学」の授業がなされるのが普通であらう。しかし、私共は、あえてこの作品を用いず、行動伝承としての手遊び「きつねの窓」を体感させることによって、「三年生にとつての文学」の授業を行った。けれども、そのような方法は文学の授業ではない、という声が即座に聞こえてきそうである。

しかし、そもそも「文学教育」の中核をなすものは何であろうか。『きつねの窓』の場合、子どもが「きつねの窓」を作り、非現実な異世界をのぞき見ることによって、無意識世界へのイマジネーションの働きを実感したり、「不思議さ」を感じたりすることにあると考える。そのためには、子どもたちにとつては、「今」体感することが大事であって、

読み取りと共にイマジネーションを喚起することは、炭酸の抜けた飲み物でその飲料を味わいなさい、と言っているようなものだと考えるのである。無論これは、作品の読み取りを否定するものではなく、あくまでも「三年生にとつての『きつねの窓』」の授業の場合である。

## 2. 指導案（抜粋）

（1）日時 平成22年8月13日

午前9時～10時

（2）児童 静岡県伊豆の国市立湯ヶ島小

学校

第3学年 亀山貴洋子学級

男子8名 女子6名 計14名

（3）領域 構成・感情

#### (4) 授業テーマ

日常性を転換させる方法としてのおまじない

―「きつねの窓」をのぞいてみたら―

#### (5) テーマ設定の理由

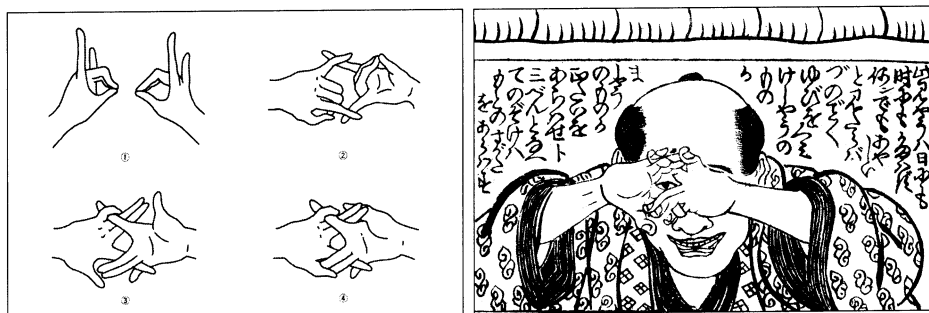
私共は長年に亘って、言葉に先行する感覚、感情および意識を国語教育の中核として考えてきた。経験によって得られるさまざまな知識や技術も必要であるがそれ以上に、感覚や感情に支えられたイマジネーションが人間の行動を誘導すると考えている。

授業を行った三年生という時期は、まだイメージ世界の中に深く浸りながらも、徐々に現実的な意識が芽生え始め、その意識世界の転換を迎えようとする大事な時期である。

そこで、子どもたちの根元的なイマジネーションを開放することが、子どもたちの発達・成長を考える上で不可欠であると考えているのである。

今回取り上げようとしているおまじないの「きつねの窓」は、日本人にとって古くから伝承され残されてきた行動伝承である。そしてそれは、日常の中において、非現実(イメーシ)の世界をのぞき見る(かいまみる)知恵であったとも言える。その「きつねの窓」の不思議な力が、意識世界転換の微妙な時期にある子どもたちの中にどの程度生きているの

か。そして、そのおまじないの不思議な力で、どれだけ「自分の」イメーシ世界を語ることができなのが見届けたい。



『しぐさの民俗学』(常光徹)「狐の窓」より

#### (6) 指導計画(一時間扱い)

#### (7) 本時の目標

・伝承的なしぐさである「きつねの窓」を通して、イマジネーションを喚起し、子どもたちが自ら持っている時間・空間・人間(じんかん)の広がりを知る。

#### (8) 本時の展開(抜粋)

○自分たちが知っている手遊びを紹介し合い、その時どんな思いをこめていたかを発表する。

・ 拝む ・ ジャンケン ・ 指切り

・ アツカンベー など

○教師の、伝統的な身ぶりやしぐさを見る。

・ シー ・ 指さし ・ うずまき

・ 手合わせ(つけない) ・ 器 など

○手には何かわからない力があることを感じ取る。

○手を狐の形にして、自由に遊ぶ。

○「きつねの窓」を作って、のぞいてみる。

○ワークシートに、自分の「きつねの窓」から見たものを書き、発表しあう。

○「きつねの窓」から見えた「自分」をワークシートに書き、発表しあう。

○今日の授業で学習したことを確認する。

## (9) 評価

・伝承的なしぐさである「きつねの窓」を通して、イマジネーションを喚起し、子どもたちが自ら持っている時間・空間・人間（じんかん）の広がりを感じることができたか。

## 3. 授業記録（抜粋）

◎授業者 長浜 瀬底 亀山（担任）

※「」は子どもの発言。（ ）は子どもの反応。子どもの名はカタカナ（仮の名）。

（1）手遊びをしたり、手を使った伝統的なしぐさを見て、思ったことを発表する。

長浜 手とか指を使った、みなさんの知っている遊びを教えて。

（子）「ジャンケン」「犬」「恐竜」「クワガタ」「カブトムシ」「カニ」

長浜 みんなが普段生活している中で、何気なく手を使ったり指を使ったりしてやっていることない？

（子）「こうやってやる（指を鳴らす）」

「丸くなったリボンで、あやとり」

「ごはんの時に箸を使う」など

長浜 こんなふうの手を使うことってある？  
こうやって、（手を合わせるしぐさをしてみせる）どんな時にこれをやる？

（子）「いただきます」「お経のとき。お経をよくこうやって（手を合わせて）」

「手を2回打って。こうやってこうやって（手を合わせ頭を下げるしぐさ。）」

長浜 その時は何を考えてるの？

アミ おまいり。

長浜 お参りでどんな気持ちでやるの？

ヤス お願ひ。「」ができますように。」

長浜 今こうやって手と手を合わせたね。今度は合わせた後に、こんなふうにしたら。この時はどんなことを感じてるんだろう。

アミ 折る。

長浜 じゃあこんなふうにしたら？

瀬底（唇に指をあてて、「シーッ！」の伝統的なしぐさをする）次は、手を合わせる。でもね、この時手をべたつくつつけちゃいけない。間を開けておく。

（子）（みんな同じしぐさをする。しーんとしている。視線は手と手の間の子が多い。）

（子）なんかびりびりする。

瀬底 みんながもっている手の不思議な力だね、今日はみんなと一緒に勉強するの。

アミ なんか、あったかくなってきた。

（子）磁石みたいな感じ。

瀬底 暖かくなってきた？うん、うん、磁石みたいな感じよね。じゃあ今度は、手を器みたいにして。（手の器の中を「ふーつ」とふくしぐさ。）なにか動いている感じがす

る？ さあ息吹きかけて。よく見てね。

（子）（子どもたちは、教師のしぐさを見ながら、一心に手の器に息を吹きかけながら、器の中を見ている。）

瀬底 自分の手の中に、なにかいるような感じがする？

（子）（うなずく子が多い。）

（2）「きつねの窓」を作り、何が見えたかを発表しあう。

瀬底 次は（両手できつねの形を作る。）きつねさんときつねさんで遊んでごらん。

（子）（全員が自分一人で遊ぶ。左のきつねと右のきつねをくつつけてお話しするようなしぐさをする。）

瀬底（左右のきつねを動かしながら。左のきつねは後ろを、右のきつねは前を見るようなしぐさをする。）後ろ向いてるきつねさんと前向いてるきつねさんと、こうやって耳と耳を合わせる。（両手のきつねの人差し指と小指を互い違いに合わせてみせる。）

瀬底（「きつねの窓」を子どもたちに見せながら）これね、「きつねの窓」って言うの。このきつねの窓をね、じーつと見てるとね。なんか見えてくる。

（子）（様々なことを言い出す。「見えない。」「なんか動いてるみたい。」など）

瀬底 ここ、じーっと見てね。なにかが見えてくるかな。今日はね、このきつねの窓になにか見えるかなっていう勉強なの。

(子) (教師の話を聞きながら、しきりにきつねの窓を見つめている。)

瀬底 このきつねの窓にね、なにかが見えるようになったらね、すぐくすてきなことが起こるの。

長浜 じゃあ、みんなもう一度やってみようか。上手にできると、さっきこの手の中になにか感じられるって言ってたの？

ヤス 不思議な力

長浜 「不思議な力」。じゃあみんな、そーと指と指を触れているとなにか不思議な力が生まれてくるから、その不思議な力を感じながらのぞいてごらん。見えてきたなあっていう人、手を挙げてみて。

(子) (数人が手を挙げる。)

長浜 なにか見えてきたかな？

(子) (一生懸命にきつねの窓をのぞいて、なにかを見ようとしている。)

長浜 なにか不思議な力みたいなものは感じた？ まだ感じない？

(子) ちよっとだけ感じた。

長浜 ちよっと力を感じてきたっていう人、どれくらいいる。(五、六人の子が挙手) はい。少しずつ感じてきたかな。じゃあ、なんか感じてきたところで手を離さない

で、じーっと見ててごらん。なにか見えてきたら、プリントに見えてきたものを書いてください。

ゼン えーっ、無理。(と言いながら、きつねの窓をじつと見ている。)

(子) (一生懸命プリントに書きこむ子。お喋りしていて書けない子。先生と話しながら考える子など。)

(先生方が声をかけても、なかなか書けない様子だが、自分なりになにか書くように考えている。ここまで五分半ぐらい)

長浜 見えた人と見えなかった人がいたんだけれども、全然見えないからって恥ずかしいことではありません。これから見えた人に、どんなものが見えたか発表してもらいますから、みんなよく聞いてください。

アミ きつねの窓を見ていたらきつねが見えた。なぜかきつねみたいなのから力が来る。きつねはなぜかわたしを見ていた。だんだん遠くに行った。あの力を感じるきつねは遠くに行った。

長浜 遠くに行ったの。不思議でしょう。アミさんの前にきつねはいるの？ (子「いない。」「いないよね。いないし、みんなには見えないけど、アミさんには見えたんだね。不思議だね。だからさっき不思議な力って言ったんだよね。他に発表してくれる人いるかな。)

ヤス 不思議な黄緑色の光を見て、この光を浴びたら自分が飛ぶかもしれない。

長浜 そうするとヤス君はその光になにを感じたの？

ヤス うーん。自分の飛ぶ力。

長浜 飛ぶ力。見えたものにも力を感じたんだって。さあ、他に発表してくれる人いるかな。みんななかなかすごいですよ。

エリ ダイヤモンドにも見えてきて、きつねにも見えてくる。

長浜 そうするとのぞいて見えたのは、ダイヤモンドのように見えたり、きつねのように見えたりしたんだね。他にどうだろう。ケン 小さなさいころみたいなものが見えてきて、きつねがさいころをボールみたいにしていた。

長浜 みんな見えなかった見えなかったって言うけど、こんなにたくさんのお友だちが、いろんなものが見えています。

チカ 紫色の丸いものが見えた。

長浜 紫色の丸いもの。チカさんは紫色の月だって。月って空の。それがこれくらいに見えた、と言うことだそうですね。不思議でしょう。色も紫色に見えたんだね。

ケン 赤色の丸いものが見えた。

長浜 それでそれは何？

ケン よく分からないけど、輪みたいなの。長浜 輪みたいなの？

亀山 ケンさんのは、真ん中に穴が空いてるんだ。チカさんのは、紫色が全部なの？  
(うなずく)

長浜 同じ丸いものでも全然違うね。

リカ きつねの顔が見えて、目を離すとね、いなくなる。

長浜 目を離れた途端にいなくなっちゃった。きつねの姿が見えたのに、じっと見た時はいてくれたのに、目を離したらいなくなっちゃった。不思議だね。

モモ きつねの顔が見えてきて、もう一回見るときつねが見えなくなった。

長浜 モモさんとリカさんは同じきつねが見えたんだけど、違いが一つだけあったね。何？うん。見たら消えちゃったんだって。リカさんは目を離したら消えちゃったんだけど、モモさんは見たら消えちゃった。ねえ、不思議でしょう。

こんなふうに、本当は目の前にはいないもの、ないものなんだけど、見えてしまうなんてことは、きつねの窓では…。

アミ 見えてしまう。

長浜 見えてしまう力がある。さあ、たくさんのお友だちがこんなにいろいろな、その力を使って見えました。(プリント回収)

### (3)「きつねの窓」に「自分」を見る

瀬底 みんなきつねの窓で見るのがだんだん

上手になってきた。でも、きつねの窓で見るのは、「普通に見る」のとちよつとちがうの。きつねの窓は見えないものが見えるっていうのはどういうことだと思ふ？目をつぶってても、見たいなあーって思うものを心に思うとね、それが見えちゃう。例えば、「どこでもドア」みたいなのがあったらすごくいいでしょう。「どこでもドア」がさつと開いて、行きたいところに行けたらいいでしょう。それみたいに、きつねの窓は、「どこでも窓」なんだ。(プリントを配る。)

長浜 では、もう一度きつねの窓を先生と一緒に作ってみようかな。今度はさつきよりももっともつと力を感じられると思うから、まず目をつぶってみてください。さつきは、いろいろなきつねが見えたり、輪が見えたりいろいろしたけど、それも不思議な力のおかげ。今度はもっともつと力を感じて、とっても難しいことかもしれないことなんだけど、「自分」のことは見てください。わかるかな。まだ、目をつぶっていいからね。「自分」が見えるかな。(子「見える」のつぶやき)ちよつと心の中で自分を見てみて。(子「見えるよ。」のつぶやき)見えてきた？じゃあ、見えてきた人は、その見えてきた自分を書いてみてください。

(子) (子どもたちは、ほとんどの子が書き始めている。中には全く書けない子もいる。悩んでいる様子。)

(子どもたち、しきりに鉛筆を動かして、きつねの窓に見えた自分を書いている。この段階で書くスピードが高まった。十二分ぐらい)

長浜 いちばんに発表してくれるって人いますか？

ヤス 最初に見たのは、赤ちゃんの時、自分が泣いていたことと、休んだあとは未来の自分が歴史家をしてたのが見えた。

長浜 ヤス君は、最初に赤ちゃんの時の自分を見て、一回お休みした後には、今度は赤ちゃんじゃなく未来の自分だったね。すごいね。赤ちゃんの時っていうのは未来じゃなくて。なんて言うの？(子「昔」)うん。昔のこと。昔の自分と未来の自分を、今きつねの窓から見えたって言うてくれた。他にも同じように何人かのお友だちが、いろいろ書いてくれています。

タク テレビを見ている自分が見えた。外でサッカーして遊んでいた。海に入っていた。

長浜 そのタク君は、今の3年生のタク君ですか？(うなずく。)

チカ 妹たちとお風呂で冷たい水で遊んでいて、妹たちがおぼれて一人じゃ見れないく

ら大変になつてゐる。

長浜 今、妹たちと遊んでいるチカさんは、いつ頃のチカさんかな。(首を傾げる。)今のチカさん?(うなずく。)今のチカさんが妹たちと遊んでいる。

亀山 これはほんとじゃないよね。(笑)本当だったら大変なことになっちゃうよね。

エリ 友だちと遊んでる自分。あと、鬼ごつとか、氷鬼とか、色鬼とか、かくれんぼとか、人とりとか、いろいろな遊びをやつて、六才ぐらいにやっていました。今も氷鬼とかいろいろやっています。

長浜 いろいろな遊びが出てきたでしょう。未来の自分。昔の自分。今の自分。

リカ 自分の顔が影のように見えてくる。友だちと二人で、わたしの家で手をつないで遊んでいた。

長浜 そのリカさんは?

リカ 六年生の卒業式が終わつてからの六月。

長浜 六年生でいいですか?そうすると未来の自分の姿をリカさんは見てくれたのかな。

カイ 紫色のまるの周りにオレンジ色と黄色と赤色の輪で重ねられて、地球をガードしているみたいだった。もう一度目をつぶつてみたら同じものが映っていた。すごく不思議だった。その上に宇宙人みたいな生き

物がいた。

長浜 宇宙人を見てしまった。今の中には、自分はいなかったんだね。自分はいなかったんだけど、そういう場面が見えたんだね。

ハル 虹みたいなのが見えた。色は三色だった。ピンクと青と黄色だった。

長浜 虹が見えたんですね。そこには自分はいなかった?(うなずく。)でも虹が見えた。ミホ きつねと自分がボール投げをしていて、自分ときつねさんが笑っていて、ボール投げをして、もう一度見たらいなかった。

長浜 もういなかった。さつきね、きつねが見えたけどいなくなつたって言ったよね。でも、ミホさんはきつねと一緒に遊んだんだよね。一緒に遊べたんだね。その時のミホさんは今のミホさんなの?(うなずく)今のミホさんがきつねと一緒に遊べた。アミ 自分の心が見えた。しずくの形をしていた。笑つたり泣いたり怒つたりしていた。どうしてしずくの形かわからない。疲れていたりしていた。

長浜 ちょっと先生にもう一回読ませてくれる?「心の自分は、しずくの形をしていた。笑つたり泣いたり怒つたりしていた。どうしてしずくの形かわからない。疲れていたりしていた。」自分は何?

(子) しずく。

長浜 心の自分はずくの形をしてるんだね。アミさんはいつのアミさんか、とかつていう質問してもしょうがないよね。今なのか、未来なのか、昔なのかもわからない。わからないね。不思議なものを見ましたね。すごいですね。

#### (4) 授業のふり返り

長浜 今まで、いろいろな自分が見えたり、自分が見えなかったけれども、目の前のものでないものを見てくれた人、たくさんいたよね。みなさんに、その不思議な力を与えてくれたのは何?

(子) 神様

長浜 神様?みんなもう一度やつてみようか。(きつねの窓を作る)

(子) きつねの窓

長浜 目の前にあることではないのに見えることって、なんて言うの?本当は見えないはずのものが見えたりするのって、何?

(子) 錯覚。

長浜 錯覚?錯覚以外の言葉、なにかない?こうやって目の前にあるものじゃないものが見えるよ、感じるよっていうのをなんて言うの?

(子) (つぶやきで) 夢

長浜 あつ、夢って言うてくれた人がいた。

夢だったらわかる？みんなが一緒に生活したり遊んだりしている時に、もしかしたら不思議な夢を見ることがあるかもしれない。で、今日は実はそういう勉強をしたんです。きつねの窓を作って、パワーを感じて、今日は夢を見たいです。でも、きつねの窓を使わなくても、もしかしたら「そんなの簡単だよ。」「ぼくはいつも夢を話せるよ。」っていう人がいるかもしれないね。夢は起きてる時も見れるんだよ。そういうところを今日は感じてもらいたいなと思います。

ます。

瀬底 私は、寂しいっていうかつまんないなあって思ったら、きつねの窓を見るの。みんなは今の自分が見えたでしょう。だけど私は、小さい時の自分が見える時があるの。いろんなことが見えると、すごく楽しいわよ。だからみんなも、こうやって見てみて。そして、お友だちの夢をいっぱい聞いたので、どんな夢が楽しそうかなっていうのをふり返ってみたらいいですね。

#### 4. 授業後の協議会と考察

(1)「文学」を読まないのに、「文学」になる

小林 教材観とか分かりやすくありませんか。

難波 ものすごく分かりやすいです。これは、「きつねの窓」という作品を使おうという気はなかったんですか。

中川 初めはありました。あったんですけれど捨てたんです。

難波 それでよく分かりました。それで十分です。

中川 でも、お話の「きつねの窓」の有用性はすごくありました。

小林 そして、安房直子さんのすばらしさもよく分かりました。

難波 だから、今日はこれをやっていて、「きつねの窓」という作品を読んでいるんだなと思ったんだよ。きつねの窓」という作品を読んでもうと、今日のような境地に行かないわけですよ、かえって。だから、文学を読んでも文学にならないんだって。文学を読まないのに文学になるんだって。うまくいけばね。ぼく、勉強になったんだけど、これを日本教育学会に出してもいいかな。文学を読まない方が文学が読める。今日は、本当にそう思った。この作品は難しいよね。うまくいった授業を見たことないから。「きつねの窓」は、どこからかきているの。

小林 『しぐさの民俗学』という本にあるんです。しかも、ずばり「きつねの窓」が。

中川 そもそもその出発点は、おまじないをや

るなら「きつねの窓」。子どもたちからおまじないがいつぱい出る、そんなことほくたちやっているよっていうふうな感じでしょう。普段子どもたちはそれを封じ込めているんですよ、学校生活の中では。いつぱいやっているんだけど、そ知らぬ顔してやっている。そしてあまり意識してやっていない。そういうところをいっぱい聞けたらいいなと思っていました。だから、低学年でやりたいと思っていました。

小林 教材観の最初のところで、「きつねの窓」というおまじないは、「日常世界のとなり、もう一つの別の世界、異界を開く仕掛けと考えられる」。ここに共通理解が集中したわけです。そして、その仕掛けには必ず身振りやしぐさが伴うっていう。で、今日は、子どもたちが思った以上に最後までしぐさにこだわったでしょう。(窓を作って)真剣にこうやって見ていたんですよ。私だと、始めはこれを使っても、すぐこんなのなくてもいい、もう自分のイメージの運動に乗っかっていけばいいって軽く思っていたら、子どもは行き詰るとまた窓に帰り、止まるとまた窓を凝視し、本当に一生懸命念じるようにこれを見ていたでしょう。だから、そういう仕掛けだし、先人が残してくれた「きつねの窓」っていい



うのは、今の子どもたちにもすっかり生きているって思いました。本当に素直に取り組んでいたよね。

亀山 目を開けていると見えない、目をつむらないと見えないなんていう子がいるのよ。だから、この子、心の目で見ていんだなと思った。

中川 のぞいていないんだけど、のぞいているのよ。意識がいつているときには見えるけれど、目をそらしたら見えなくなっただか。

瀬底 目を開けると消えちゃうって。

## (2)「きつねの窓」に「自分」を見る

小林 安房直子さんが『きつねの窓』に盛り込んでいた、さまざまな文学的要素っていうか、イメージを触発する要素っていうのを、子どもたちはいっぱい言っているんですよ。思いが離れればもう消えてしまう。もう一回見てももう二度と見えないとかね。見事に言っているし。

中川 やっぱ、「自分」を書かせたのはよかったね。時間の観念を表す言葉も出ただけだけど、広がっていったよね。

小林 「時間」を書こうとしても書けない子がいたの。「自分」が書けていない子は最初に書いた時よりも広がっているの、結果として「自分」が書けているか書けてい

ないかが基準ではなく、言葉かけによってどれだけ動いたかっていうことなの。

しずくちゃん(アミ)は最初からよかったね。言葉では、泣いたり怒ったり笑ったりって書いてあったんだけど、疲れたって。

瀬底 じゃあ、パワーを入れてあげたらって言ったら「もう疲れた。」って。

亀山 それから、チカちゃんの、妹たちがおぼれて……大変なことになったっていうのは……。

小林 あの子に「どういうことして遊んでいるの。今、いちばん盛り上がるのはどんな遊びなの。」って言ったら、ケタケタ笑い出してすごいいい顔であれを書いたの。だから、大変なことが起きたのではなくて、今年暑いからよく水遊びしているじゃない。それで、お姉ちゃんだから、下の妹たちを溺れさせないようにしているんだけれど、溺れるぐらい盛り上がって遊んでいたのよ。

長浜 チカさんは、ぼくが机間巡視して見たときに、「これはいつの自分なの。」って聞いたら、「だいたい二年後ぐらいの自分だ。」って言ったんです。じゃあ、未来のちかさんなんだねって。ところが、実際に指名したら、「今の自分だ。」って言い換えなんです。だから、子どもって、結構時間

的にはあややな状況の中で行ったり来たりしているんだなと思いました。もう一人、一学期の終業式の話をした子も、机間巡視した時に、あれはこの前の終業式の話だって言っていたんです。そしたら、実際に指したら、六年生の時のことだって言ったんですね。

亀山 六年生の卒業式が終わってからって言うっていたの。

長浜 だから、過去から未来になっちゃったみたいで。

亀山 時期はすごく悩んでいたの。「いつの自分なんだろう。」って。

長浜 ぼくが聞いちゃったから、自分で再構成してしまったのかな。

葛西 かげのようについて言っていた子がいたね。自分のも顔がかげのように見えたって。

亀山 「自分の顔がかげのように見える。友達とふたりで庭で手をつないで遊んだ。」

瀬底 だから、ぼやっとした時にやってみるって。もし子どもが体得したら楽しいかなと思う。

小林 好きなのね。手遊び。

長浜 それから、子どもたちは指に力を入れるんだね。それで疲れちゃう。

小林 それは、威力(不思議な力)とか言うから。

亀山 でも、こういうふうによった時に「あったかい」とか「びりびりくる」とか言っていておもしろかった。

小林 子どもたちはいっぱい持っているのに、それをどう取り上げて、子どもたちが次のステップに進めるような授業になっていたかなと思う。

中川 現在・過去・未来に分けるにしても、分ける観点というのか、それを先生の方が示してあげると、「じゃあ、ほくもこの子と同じだ。」みたいな感じでやっていくのはいいと思うのね。

亀山 一番初めに指名した時に。分け方はこちらに示しておいて、この子はどれに当たるかというのは全員でおさえる。そうすれば、じゃあ、自分のはどこになるかやってごらん、とか、もう一回やってみるかっていうのもいいだろうし。ワークシートにくだわったんだけど、短冊にでも書かせて貼るのもよかったと思う。

長浜 すぐに提示する。

亀山 貼りにいった時に、友達のものも見えるし、もう一回自分で過去か現在なのかって考えることができる。今回は今を見るとかじゃなくて、「自分」だと思うの。ここに映っている世界は絶対に人には見えないんだから。違う人がみたら、違うものが見えるんじゃない。

中川 「自分」を出すということは、否応なしに自分が空間移動しなくてはならない。だから、ちよつと無理をさせることが必要なんだなと思う。

### (3)「不思議な力」を実感する

長浜 瀬底さんがきつねの窓を作った時に、すぐに、廊下側の女の子が「あつ見え」って言ったのがとても不思議でした。見える前に、もう少し何か感じてもらうかなと思っていたんですけど、いきなり見えたって言うから、じゃあ、あとは見させればよかったって感じでした。

瀬底 手で器を作るのをやって、フーッていうのを少し、しつこめにやったじゃない。何かあるっていった時に視線がここに移っていったっていうのは感じたの。見えないものを見るっていう感じ。

中川 それから、すぐに「神様」って出てきたでしょ。そんなことを聞く必要なかったな。

亀山 私ね、あの「神様」っていうのを出したくなかったな。神様って言ってしまふと、みんな神様に行っちゃうわけでしょ。中川 でも、みんな神様には行かなかった。

亀山 でも、ここであるものを感じている、それだけでよかったと思うの。それが神秘なものであったり、神様の力だと思ってい

る子がいてもいいし、そこでそれぞれが感じている力でよかったかなと。「神様」っていう言葉でまとめないで、威力があるとか、分らない力があるとか、大人になったら言えるわけでしょ。そういう力を感じるものを「神様」っていう子がいてもいいの。でも、そこで言ってしまいたくなかったということなの。「不思議な力」でやってきたんだから、「神様」ではなく「不思議な力」でやればよかったと思うの。

中川 今日はいつもと違うパワーなんだよっていう意識付けがよかった。

亀山 今日は十分子どもは感じたよ。

### (4) 現実と非現実の意識のせめぎあい

中川 感じてはいるんだけど、二年生と三年生の狭間だから、無意識の中でずっと感じている子もいれば、そろそろ分離していつてる子もいる。だから、もう一つ欲を言うと、おまじないは、一、二年生でやりたかった。でも、三年生でもやる意味があるなって思った。「いや、そんなの違うよ。」っていう子も出るかなって思った。

亀山 三年生はそういう時期だつて。「なに言ってるんだよ、黒板と先生しか見えないよ。」なんていう子ももつともつというと思っていたの。でも、ほとんどの子が見ようとしていたじゃない。一生懸命「見えな

い、見えない」って言いながらやっていたじゃない。すると、ある時ぱっと見えるようになる。それでいいんじゃないかなって。

小林 書く段になって、一人一人向き合うようになったでしょ。そしたら後ろの方の男の子が人形をチョップするって。で、あの子は一人で部屋にいる時って言ったの。だから、おまじないにしても、このねらいにあった神秘を感じる、自分がいる現実のすぐ近くに別の世界があるっていう、そのあたりをあの子なんかは結構いたりきたりしているのかもね。

小林 でも、内緒のことなのにもかかわらず、みんな仲良く元気にやったのよ。

だから、元氣な神様だったね。遊びっていうのが神秘なんじゃないの。声出して、体動かして。あの子達は、体がピョンピョンはねたいのに、ここに固定されたからすごい力になったのかもしれない。

中川 異文化としての子どもの世界が分かった。いちばん後ろの子が少し抵抗するくらいでほかの子はみんな大丈夫だったもね。

瀬底 独りになったときに、ひそかにやってくれる子がいたら面白いわね。きつねの窓をしぼった形でやると、覗くっていう感じがするのよね。

亀山 だれかが「小さいい」って言ってたね。

中川 でも、(小さくても)「よく見える、よく見える。」って。

葛西 だから、途中で窓のフレームをしぼってみるなんてやってもよかったかなと。

中川 それが本来の形なのよね。

難波 子どもたちが、からっとして陽気なのは何なんだろう。

小林 瀬底さんが、元氣のない手って言った「幽霊」って言ったのね。

中川 幽霊はそれだけだったね。「かげ」は出たけれどね。オカルト風の世界には行かなかった。

小林 「こわい」とも言わなかった。

中川 ナルトなんかみたいに既成されたものが出なかった。出たらいやだなと思ってただんど。

難波 逆に言うと、タブーというか、封じ込めたものが出たわけではないよね。それがなぜなのかな。いつも研究授業では、現実的な抵抗もあるけれども、封じ込めているものを出すことに時間がかかるよね。でも、恥ずかしそうにしていたよね。あのクラスの子っていうか、みんな恥ずかしいからあなるのかな。

亀山 これって、人に言うことじゃないよね。だから、あまり言いたくないのかな。

難波 でも、どろっとしたものが無いということ、なにかあるのかな。これを町の学

校でやったら、抵抗があるということじゃなくて、もっとどろっとしているようなものが出るんじゃないかな。

亀山 おもしろくないよね。人数だって十四人だから。いじわるとかもないし。

難波 男女が仲いいよね。

亀山 気持ち悪いぐらい。幼稚園の時とか、みんなで裸でプールに入るとかね。

難波 不思議な所だよ。バスで来たときにも感じたんだけど……。

中川 正体を見るとか、そういう感じではなかったんだね。

長浜 授業って、タイミングが大事ですね。流れが大事じゃないですか。

瀬底 こうやって自由に見えたらいいよね。

亀山 そのうち、なくても見えちゃうよ。

中川 白昼夢みたいよね。

### (5) ヴァーチャルが意識世界を作る怖さ

難波 おまじないをしたっていうのがずっとあったわけでしょ。子どもたちはきつとこの後もこれをやるよね。そしてそれは、手があるからだよね。手があるということ、今日の授業が早く進んだということ、そういうことなんだな。あれがなかったら、やっぱりしんどいよね。子どもは授業が終わったあともきつねをやるだろうし、子どもたちは手の持つ力、しぐさの力みた

いなものを刻むよね。という授業だったから、今までの授業とはちよつと違う感じがしたね。子どもたちはずっと続く、今日1時間やって「不思議な世界だった」じゃなくて、いつものことじゃん、みたいにな。

中川 そうだと思うの。だから、子どもたちは、その延長線上に、授業がくるとは思っていない。

亀山 学校でだって家でだってやっていたんだけれど、これからは、もういいぞって。学校でもいいんだよって、なんでも保証してやるのよ。で、難波先生が言っていたみたいに、普段からやっていることなんだけれども、今日こうして授業をして、意識して、で、これからずっと続いていく。

小林 お母さんたちもやっていたわよ。「見える」とか「見えない」とか言って。

難波 「見えてる？」って言って、人のを覗くのもおもしろいよね。

中川 子どもは隣同士でも覗かないんだよね。

亀山 無意識に人のは見えてはだめと思っているんだね。

中川 見てもしょうがないって。

小林 大きさにゲームがあるじゃないですか。ハンドタイプの。あれに対抗するわけじゃないけれど、今の子どもたちがあそこまでゲームに没頭してしまうというのは、

その線に近いところに行けちゃっているんじゃないかなって。

難波 ぼくも同じことを考えていたんだけれども、ゲームとかインターネットとか携帯とかね、「ヴァーチャルきつねの窓」なんだよね。だから、はまるんだなって。

瀬底 本当に映っちゃっているんだものね。

小林 それが、自分が創造したものではなくて与えられたものだから問題なのよね。お手軽だね。

難波 あたかも、きつねの窓のように見えるのよ。使わなくていいから、探らなくていいから、探らなくてはならないものを向こうが出してくれるから楽じゃない。

小林 もろに洗脳されますよね。

亀山 いやになったら、リセットすればいいしね。

難波 なんて、インターネットとかゲームとかがよくないのかというと、世間の人は分かっていると思うんだけど、あれは、現実がヴァーチャルになっているんじゃないかと、ヴァーチャルが無意識世界を作っちゃうんだよ。置き換えられちゃってるんだよね。自分の無意識がまるでそこにある。きつねの窓は、自分の無意識が現れるわけじゃない。それを開花する装置なんだよね。

中川 だから、無意識層まで浸透しちゃって

いる。かわいいね。

難波 このgameもそうなんだけれども、ただ、これはぼくが現実として見るから、ここに無意識があるとは見ない。でも、ゲームを作った人間はよく分かっている。絶対、無意識にいけるって。

小林 儲けられるって。

亀山 ゲームって、無機質っていうか安息がないよね。でも「きつねの窓」は安息があるじゃない。

中川 自分がやりたい時にやれるし、自分の見たいものを見ることが出来る。

亀山 見たいものが見られるから気持ちいいのよ。

難波 小さいのがいいよね。小さいからきつねの窓なんだろうね。これ (pad) は仕事には便利だけれど、子どもには持たせたくない。

亀山 それは道具だものね。

中川 道具として使うならいいけれど、道具の領域でなくなってきたのよね。

## 5. おわりに

両手を使って「きつねの窓」を作って覗く。それだけで日常が切り取られ、異界を覗き見ることが出来るというイマジネーションの働き。そういったイマジネーションの働きを、

家でも学校でも保証してあげるこの大切さが浮き彫りになった授業であつたと思う。

しかし、現代の子どもたちを取り巻く、ゲームなどのヴァーチャルな世界は、「作られた無意識の世界」に子どもたちを引きずり込もうとしている。そのことを教師も親ももっと認識を深め、子どもの教育に当たらなければならぬ思いを新たにしている。

最後に、協議会の中で、大学教員の秦恭子氏が経験した「私にとつてのきつねの窓」を紹介して、本稿のしめくくりとしたい。

私の子どもの時のエピソードを思い出しました。あれが「私にとつてのきつねの窓」だったんだって、今思いました。

私は2歳になつて保育園に預けられるようになったんです。保育園に近づくにつれて口を閉ざしていつて、おしゃべりしなくなるんです。母親と別れるのがつらかったんですね。そこで、こうしてイメージで水を張つて、その水面に母親が映るようにして、母親を見てもらっていたんです。兄にも見せたことがあつて。その時は、保育園ではなくて、母親が何かの用事でタクシーで行つてしまう時に、兄と2人で玄関先で見送つたんですけれど、走り去るタクシーを見ながら、「お兄ちゃん、見て見て。お母さん映っているからさびしくないよ、だ

いじょうぶだよ。」つて言つて見せたのを思い出しました。

あれが「私にとつてのきつねの窓」だったんです。子どもたちは、今日きつねの窓をやつて、本当に良かったと思います。あの子どもたちがこれから、これを覗く瞬間があるだろうと思うと、良かったなつて思うんです。

(元玉川学園小学部教諭)

## スナップ 再掲②

5年生男子 ..... 9号

算数ドリル2と3の宿題を忘れたO男が、

放課後ノートを開き始めた時、D男が来て、

D男「O君、3だけやるの?」

O男「ううん、『う』だけやればいいの。さん

すうの『う』の分だけ。」

D男「そうか。『さんす』はやつて、『う』だけ

か。じゃ、すぐだね。」

6年生男子 ..... 9号

父親参観の前の日、一生懸命清掃を手伝っていると、

S男「どうして、今日はこんなにきれいにするのですか、先生。」

と、にやにやしながら言う。

教師「明日、お客さんが来るからよ。」

S男「お客さん? あつ、お父さんのこと。お

父さんは客じゃないよ。身内だよ。」

6年生女子 ..... 12号

「ちょっと人には言えない夏休みのこと」という題の作文。」

女子「私は映画を見ていたんだけど、その映画に出てきた女のひとと男の人が、だんだん近づいてきました。私は、あー、キスするな、つて思つたら、顔がまっかになりました。やつぱりキスしました。恥ずかしくて、しかたがありませんでした。」

6年生男子 ..... 9号

給食の時間、担任が手を洗いに行つて教室に帰つてきた時、ドアを閉めなかつたので、Y君が、

Y男「先生、開けたらちゃんと閉めなさい。」

といばつて言う。

教師「すいません。」

と言つて閉めに行くと、

Y男「わあー、一本取つてやつたぞ。」

と大喜び。